

オディロン・ルドン作《出現》(1883)再考—目を閉じた頭部と黒い球体の重なりにあられる死生観—

山上 紀子 (大阪市立大学)

オディロン・ルドン (Odilon Redon 1840-1916) が1883年に制作した木炭画《出現》(ボルドー美術館蔵)は、1876年のサロンで注目を集めたギュスターヴ・モローの水彩画《出現》(1876)と繰り返し比較されてきたが、モロー作品との類似以外にはなんら手がかりのない解釈困難な作品とみなされている。洗礼者ヨハネの死と宿命の女サロメを描いたモローの作品からルドンが影響を受けたことはまちがいないが、スヴェン・ザントシュトレームが述べるように、ルドンはモロー作品のイメージ全体を徹底的に変容させることによって自分の個性を強調した。

ルドンの独創性はとりわけ、画面の中央に描かれた目を閉じた頭部と黒い球体の重なりを発揮されている。苦しみとも安らぎとも判別しがたい表情をたたえて光を放つ頭部は誰のものなのか。なぜ目を閉じているのか。黒い球体は何か。黒い球体が頭部の一部を覆い隠している様態は何を意味するのか。脈絡なく寄せ集められたように見える複数の要素が、ここに想起される死の意味を確定することを妨げ、観る者を困惑させてきた。ダリオ・ガンボーニを端緒とする近年の研究動向では、ルドンが獲得したこのような曖昧性や多義性という美学に注目が集まっている。また1994年のシカゴでの展覧会以降、ルドンが同時代の自然科学や社会動向からさまざまな着想を得たことが明らかにされてきた。

本発表では、まずこの作品を1883年頃のフランスのさまざまな出来事に照らして、着想源を新たに検討する。少しずつ重ねられた頭部と黒い球体には、普仏戦争への従軍や知人の死などルドン自身の体験に加えて、神秘主義、倒錯的趣味、結核の流行、ギロチン廃止論、ズルー戦争などからルドンが受けた印象、とくに戦争や処刑などの残酷な死の諸相に揺さぶられる倫理観を読み取ることができる。ただし、死刑制度の廃止を訴えたヴィクトル・ユゴーらとちがって、ルドンはその是非を問うてはいない。

また同じ1883年に発表された、《出現》と、石版画集『起源』と、4点の木炭画との関係も指摘できるだろう。『起源』は進化論から、木炭画はエドガー・アラン・ポーの殺人小説から想を得ているが、いずれも高度に抽象化された表現によって源泉を超越し、恐怖、悲しみ、興奮、諦観などのさまざまな感情を喚起する。このように上記作品群には、一方で、死への嫌悪や恐れ、他方で、死への憧れや美化というロマン主義的な死生観の二重性があ

らわれている。さらに、同一形態モチーフの連鎖、類似する主題の統合というルドンの造形手法を考察することは、1880年代に意味の確定から逃れて多義性を獲得し抽象絵画へと向かっていった過程を具体的に明らかにする意義をもつはずである。